

# 風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2015 秋号 **72**

公益財団法人 和歌山県文化財センター



## 特集 新現場紹介

(左上) 宝来山神社本殿（第三殿）、(右上) 金剛三昧院四所明神社本殿、(下) 丹生都比売神社輪橋

# 特集 新現場紹介

平成二十七年六月から、和歌山県内の文化財建造物の保存修理が、三箇所です。四事業が始まりました。今回はそれぞれの事業についてご紹介します。

## 金剛三昧院 「伊都郡高野町」

### 重要文化財 四所明神社本殿の保存修理

弘法大師空海が高野山を開創してから一二〇〇年となる「開創イヤー」である今年は、四、五月に行われた開創法会を終えても、例年より多くの人で賑わっています。金剛三昧院も例に漏れず、国宝多宝塔の特別公開などもあって観光客が途切れません。そんな境内にあつて、比較的ひっそりと木陰に隠れるように建っているのが、今回保存修理を行っている四所明神社本殿です。

室町時代の天文二十一年（一五五二）に建立された、一間社春日造、檜皮葺の比較的小さな建物ですが、細部の型式は省略されず丁寧につくられています。特徴的な彫刻の彫り方や、身舎の前半分を開放とする平面型式は河内地方の特色とされています。

変不安だったので、檜皮を解体してみると想定よりも腐朽は若干軽微な部分もあり、胸をなで下ろしたところでは、事業期間は六月で、この号が皆様のお手元に届くころには工事の大方は完了していることでしょう。秋の紅葉シーズンに間に合うかは微妙ですが、高野山にお越しの際は金剛三昧院の少し奥まった、小さなお社も気に懸けてみてはいかがでしょうか。

金剛三昧院は立派な石楠花でも有名ですが、その裏側の斜面を少し登った木立の間に四所明神社本殿が建っているため、日当たりが悪く、落ち葉などもすぐに屋根に積もり、屋根の檜皮には苔が繁茂しています。苔むした屋根の雰囲気は申し分ないのですが、檜皮の維持にとっては過酷な環境です。苔に覆われると腐朽は急速に進み、数年前から軒裏より雨水が染み出す状況でした。前回の葺き替えが平成七年なので、二十年を経ずしてダメになったこととなります。檜皮は一般的な耐用年数が三十年前後とされていることから、環境が及ぼす影響がいかに大きいか、良く判ります。長く修理を待ちわびていた四所明神社本殿ですが、この度屋根葺替修理に着手することになりました。小屋裏や軒廻りなどがどれだけ破損しているのか、外観からは想像するしかなかったので、工事開始前は

（結城啓司）



写真3 小屋組等を解体した状況



写真2 檜皮を解体した状況



写真1 解体前の屋根

## 丹生都比売神社 「伊都郡かつらぎ町」

### 史跡 輪橋の保存修理

「にほんの里一〇〇選」にも選ばれた天野の里を縫うように進み、丹生都比売神社に着くと、おそらく一番最初に目にするのが現在修理中の輪橋りんきょうでしょう。輪橋は太鼓橋とも呼ばれるように、半円形の反りがついた木造の橋です。活き活きとした緑を湛えた木々を背に、赤色の力強いアーチを描く輪橋が蓮池に浮かび上がる様を目にされて、心を打たれた方も多いのではないのでしょうか（表紙写真）。

この輪橋が史料に初出するのが、鎌倉時代に描かれた「絹本着色弘法大師丹生高野両明神像」と考えられています。その後も各時代の絵図に描かれ、舞楽装束のモチーフにも用いられるなど、神社の象徴として古くから継続して存在したようです。しかし、建物と違って屋根がなく、木部が雨ざらしで腐朽や損傷を受けやすいため、現在の橋の部材自体がどこまで遡れるのかは不明です。とはいえ、史跡や世界遺産である丹生都比売神社の境内を構成する非常に重

要な要素であることは間違いありません。

先に述べたように、橋自体は何度も補修や塗り替えが行われており、今回も数年前に行った塗装の状態が悪く、塗膜の剥離が進行していることから、木部の補修と塗装の塗り直しを行うことになりました。また、今回は輪橋としては初めて、史跡の構成物に対する国や県、町から補助金を得て修理を実施することもあり、塗装に用いる塗料や色味、仕様などの検討を慎重に行いました。そのなかで、赤色塗装の種類については平成二十五～六年に保存修理を実施した本殿と同様に、かつては現在の鉛丹えんたん系ではなく、酸化鉄系の塗料であったことが判りました。また塗り分けの仕様も現在とは異なることが判明し、今回の塗装仕様に反映することになりました。塗料も出来るだけ伝

統的なものに近く、耐久性も加味した、実績のあるものを使用します。

修理中は素屋根で覆われているため、この景観を楽しむに來られた方には申し訳ない限りですが、順調に修理が進めば年内に本体の工事を完了して素屋根を解体する予定です。来年の正月には新たな姿で皆様をお迎えできるよう、工事を進めて参りますので、少し様子が変わった輪橋がみられることを楽しみに、初詣においで下さい。

（結城啓司）



写真1 修理前の輪橋



写真2 高欄と橋板を取りはずした状態

# 宝来山神社 「伊都郡かつらぎ町」

重要文化財 本殿（四棟）の保存修理

県指定文化財 末社東殿・西殿の保存修理

かつらぎ町萩原にある宝来山神社では、平成二十八年十月の正遷宮に向けて境内の整備が進められています。その中で保存修理事業として、本殿四棟と末社二棟では檜皮屋根の葺き替えと塗装の修理をおこなっています。

宝来山神社は、宝亀四年（七七三）に和気清麻呂が八幡宮を勧請したことに始まると伝えられています。境内地は古代の官道である南海道に面し、平安時代には柿田荘と称される、京都高雄にある神護寺の荘園となります。周辺には「文覚井」と呼ばれる中世からの灌漑水路も残るなど、歴史と由緒のある場所です。

現在の本殿は、豊臣秀吉の紀州攻めの戦禍を受けて焼失した後、慶長十九年（一六一四）に再建されたもので、四棟ともに国の重要文化財に指定されています。「春日造」と称する同じ規模、同じ形式の建物が横に並び、さらにその両脇には県指

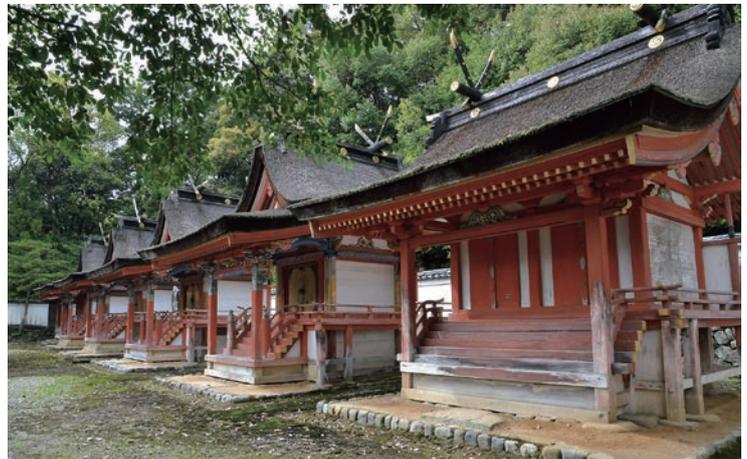


写真1 社殿の全景を東側より見る  
社殿は、向かって右（写真では手前）から末社東殿、第三殿、第一殿、第二殿、第四殿、末社西殿の順に並び建ちます。

定文化財である「二間社流造」の末社が一棟ずつ建ち、全部で六棟が一行に並び形式をとります（写真1）。

保存修理では現在、第一殿、第三殿と末社東殿の東側三棟で修理を進めています。本殿、末社ともに、昭和四十六年に解体修理がおこなわれ、平成四年には檜皮屋根の葺き替え修理がおこなわれて来ました。今回の修理では、檜皮屋根を二十四年ぶりに葺き替え、塗装を四十五年ぶりに塗り替え

ることになります。

では、それ以前の修理はどうであったか。神社には江戸時代からの修理の記録が多く残されており、これらをまとめると、慶長の再建以来二十年から三十年ごとに修理が繰り返されて来たことがうかがえます（表）。また、保存修理の実施中は、修理の範囲や補修の方法を決定していくことに合わせて、調査をおこなう絶好の機会でもあります。今回の修理では、昭和四十六年の解体

表 宝来山神社における近世以降の修理の歴史

和 暦	西 暦	修理の内容	記録等
慶長 18	1614	(本殿四棟が再建)	棟札
寛永 13	1636	屋根葺替	棟札
(この頃、末社二棟が建築されたと思われる)			
寛文 3	1663	屋根葺替	棟札
貞享 3	1686	屋根葺替	棟札
元禄 13	1700	詳細不明	棟札
宝永 5	1708	屋根葺替	棟札
(この間の記録なし)			
文化 14	1817	屋根葺替・塗装修理	文書
(この間の記録なし)			
明治 10	1877	屋根葺替	文書
明治 34	1901	屋根葺替	文書
昭和 16	1941	屋根葺替	文書
昭和 46	1971	解体修理	報告書
平成 4	1992	屋根葺替	文書
平成 28	2016	屋根葺替・塗装修理	



写真3 修理前の末社東殿を南西より見る  
「二間社流造・檜皮葺」という形式の社殿。



写真2 修理前の第一殿を南より見る  
「春日造・檜皮葺」という形式の社殿。

修理で用いられなくなった社殿の部材が小屋組の中に一部保存されていることを確認しました。第一殿では、屋根正面の妻飾りつまむすび



写真4 第一殿の小屋組内に保存されていた屋根正面妻飾り旧部材の仮組み状況

昭和46年の解体修理時の調査で、修理前の妻飾り（手前）が江戸時代中期に改造されたものと判明したことを受けて、修理では慶長期の姿に復原されています。



写真5 第一殿での屋根補修状況を南西より見る

（三角形をなす木組み）の構成部材一組分が残されており（写真4）、さらには、この妻飾りを再用せず現在の姿へと変更した経緯を示す部材も確認しました。保存修理工事で作成された報告書にも調査や変更の経緯は記されていますが、今回の調査による保存部材の確認によって、その内容を容易に追体験することができました。  
文化財建造物の保存修理では、棟札や文

書などの文字記録の他に、建物や部材そのものが有する情報をいかに後世へ伝えるか、ということも大切な役目となります。宝来山神社の建物でも慶長期以来四〇〇年のあいだ受け継がれて来た情報に加えて、平成の修理での情報も次世代へ受け継いでいけるよう、修理に臨んでいます。その中で得られた成果は今後もこの誌面で紹介していきたいと思えます。  
（下津健太郎）



## 亀山城跡測量調査

亀山城跡は、JR御坊駅北側にある標高約122mの山上に築かれた城跡です。戦国時代に日高地方を中心に牟婁・有田地方にも勢力を及ぼした湯川氏の城で、山麓に位置する湯川氏館（小松原館）が常時に生活する館、亀山城が戦闘時に籠る城となります。

御坊市教育委員会では、亀山城跡の県指定史跡申請の基礎資料を作成するために、城跡の地形測量を計画しました。その業務支援を当センターが委託を受けて、4月から5月にかけて実施しました。業務内容は、市が所有する主郭部付近の地形測量(図1)と、城全体の縄張りの作成(図2)です。

主郭部は、頂上部を占める曲輪Ⅰと、その南に取りつく曲輪Ⅱで、周囲に土塁を巡らしています。曲輪Ⅰと曲輪Ⅱとの高低差は約3mで、地山を掘り残した斜路で繋がっています。曲輪Ⅱの西側には土塁が途切れる箇所があり、虎口(出入口)を想定する

ことができます。また、曲輪Ⅱの南側の土塁が途切れる付近にも虎口が想定できます。

これまで、亀山城跡は周囲が開墾され、主郭部のほかは、Ⅲ～Ⅴの曲輪などが残る程度で、それほど大きな山城と認識されていませんでした。しかし、主郭部周辺を踏査した結果、一部削平はされているものの、江戸時代に書かれた「紀伊国古城並道法海路船懸帳」の内容通り、斜面を何重にも巡

る曲輪を確認することができました。その規模は、日高川町の手取城跡とともに県下

で最大となります。尾根筋を掘削した大規模な堀切はありませんが、山塊全体に長く曲輪を配置しています。これは大勢の兵を城に動員・配置できることの裏付けで、湯川氏の勢力が強かったことが窺えます。

(川崎雅史)

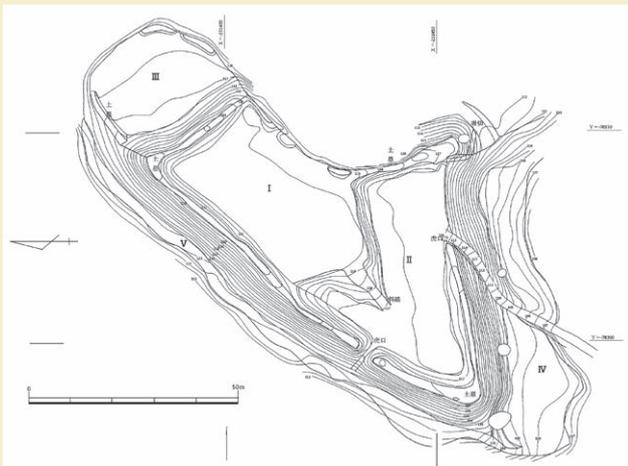


図1 亀山城跡測量図

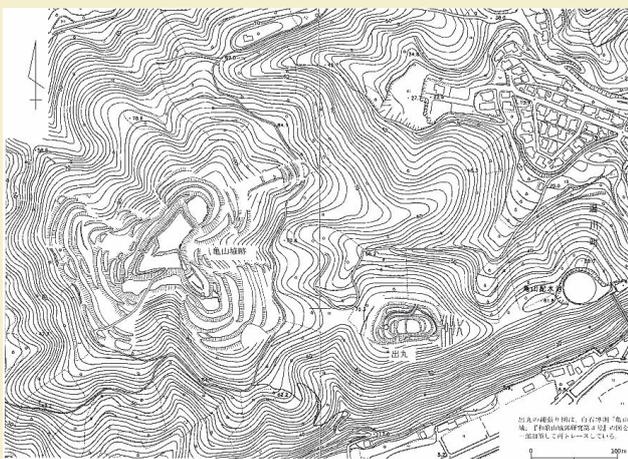


図2 亀山城跡縄張り図

## 文化財建造物修理技術者の道具 ① カメラ

文化財建造物の修理現場を見かけたことがあるでしょうか。普通の工事現場と違い、職人と共に「修理技術者」が携わっています。修理技術者とは何者か。特殊な業務ゆえ判然としない方が多いと思います。今回から、その一端を私たち修理技術者が使用している道具を通して紹介していきます。調査をして建物の大きさ、間取り、構造はもちろん、墨書や過去の修理で用途を変更している材料を探したりなど、次の世代が行う修理に「修理工事報告書」として判明したことを伝えていきます。ですから、私は現場では常にカメラを持ち歩くようにしています。皆さんは普段どんな写真を撮っていますか。文化財建造物の修理現場ではスナップ写真のような撮り方をしているかもしれません。建物が歪んだり、人や自動車等の余計な物が写り込まないように気を配りながらカメラを真っ直ぐ構えて、時には三脚に据えて水平垂直を守って撮影しています。そして、修理工事では建物の詳細を出来るだけ記録しておく為に、小屋裏や床下に潜り込んだり、足場や屋根によじ登ったりして撮影することもあります。これは普通では味わえない醍醐味です。

写真撮影は現在、デジタル一眼レフとフィルムカメラ（中判・大判）を併用して行っています。文化財ではフィルムカメラの信用度がまだ高く評価されていることが理由ですが、今では殆ど見かけないようなカメラも現役で活躍しています。実は20代の私、恥ずかしながらフィルムカメラを扱ったことがありませんでした。良い記録を残せるように精進しなければなりません。

（大給友樹）



修理現場で使用しているカメラ  
（左から、デジタル一眼・中判カメラ・大判カメラ）

## きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

### 発掘屋余話 ③1 すずやき

この秋、一ヶ月ほど新宮市の歴史民俗資料館の一面をお借りして小さな展示会を開催させていただく予定です。先日、その事前協議に若手職員のY君と二人して新宮市まで出向いておりました。

その用務が終わった後、ふと思いついて「すずやきって知ってるかあ？」と彼に尋ねたところ、しばし考え込み、「たしか北陸の——」との返答。うーん、まいりましたねえ。真面目です。たしかに考古学的には正解ですが——。

少し説明をしておく、彼が一瞬思い浮かべたのは「珠洲焼」。能登半島、現在の石川県珠洲市周辺で平安時代の終わりから室町時代に掛けて焼かれたやきものです。

常滑や備前といった、俗に「六古窯」と言われている中世陶器に比べると少しマイナーかもしれませんが、北陸を代表する地方窯とっていいでしょう。

その商業圏は広く、日本海ルートで新潟・秋田はもちろん遠く北海道まで運ばれています。須恵器の技術を踏襲したやきもので、黒灰色を呈し、体部に斜め方向の叩き目が施されているのが特徴です。筆者が知る限りでは、和歌山県では唯一、根来寺遺跡で数点出土しているだけです。

ともかく彼が返答したのはこの「すずやき」です。他方、筆者が解答として期待していたのは「鈴焼き」——。鈴の形をしたペビーカーテラ、知る人ぞ知る新宮の銘菓です。あえてお店の名前は伏せますが四国特産の和三盆を用いた逸品。おいしいですよ。

予想に反した返答をしてくれたY君は本誌・風車の編集担当。先日、彼の原稿の催促に四苦八苦。そういえばあのとき言っていたねえ。「みんなに喋ったらダメですよ。あつ、書くのもダメですよ。なにかに書くような気がするなあ——」

（村田 弘）

# 催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2015年秋～2015年冬)

## (公財) 和歌山県文化財センター

- 「紀州のあゆみ-和歌山県内埋蔵文化財調査成果展-」 ※展示会は県内2会場を巡回して開催します  
場所：紀の川市歴史民俗資料館 2015年10月10日(土)～11月8日(日)  
場所：新宮市立歴史民俗資料館 2015年11月14日(土)～12月13日(日)

## 和歌山県立紀伊風土記の丘

- 特別展「紀伊の地、大いに震う～考古学から南海地震を追う～」 2015年9月19日(土)～11月29日(日)
- 特別展セミナー 2015年10月4・18日、11月29日(日)
- 特別展シンポジウム 2015年11月1日(日)
- ジュニア考古学研究発表 2015年12月23日(水・祝)

## 和歌山県立博物館

- 高野山開創1200年記念特別展「弘法大師と高野参詣」 2015年9月19日(土)～11月1日(日)
- 企画展「仮面は語る」 2015年11月10日(火)～12月6日(日)
- 企画展「紀州の四季を描く」 2015年12月12日(土)～2016年1月17日(日)

## 和歌山市立博物館

- 特別展「表千家と紀州徳川家」 2015年10月17日(土)～11月23日(月・祝)
- 史跡散歩「和歌山城を歩く」 2015年11月28日(土)
- コーナー展示「紀州藩御絵師-笹川家-、雑賀の兜」 2015年9月29日(火)～11月29日(日)
- コーナー展示「絵画にみる米づくり、南方熊楠と小笠原誉至夫」 2015年12月1日(火)～2016年3月27日(日)

## 高野山霊宝館

- 特別展「宥快・長覚展(仮)」 2015年10月3日(土)～2016年1月11日(月・祝)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

### 目次

- 1 表紙 「(左上)宝来山神社本殿(第三殿)、(右上)金剛三昧院四所明神社本殿、(下)丹生都比売神社輪橋」
- 2 特集 「新現場紹介」
- 6 埋蔵文化財課 短信 「亀山城跡測量調査」
- 7 きのくに歴史小話 「文化財建造物修理技術者の道具 ① カメラ」  
「発掘屋余話① すずやき」
- 8 催し物案内

## 風車72 (2015・秋号)

平成27年9月30日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

## (公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1  
TEL 073-472-3710  
FAX 073-474-2270  
maizou-1@wabunse.or.jp